

笠原長壽君の死を悼む

印 南 博 吉

明治大学商学部教授として多年精勤され、日本保険学会理事長および日本学術会議第三部会会員の資格を備えながら、笠原君は昨年10月14日に、国立千葉病院で亡くなられた。

一昨年の9月ごろから胃の調子が悪かったようであるが、ようやく昨年の2月27日に癌研付属病院に入り、3月13日に手術を受けた。このころ医師が胃潰瘍と告げたため、同君は死ぬ間際までそのように信じ、自分は決して此の病気に負けはしない、必ず再び教壇に立つと云う意向を示していたのであった。しかし数えどし80歳の私を残して、59歳の若さで亡くなったとは、何とも情無いことである。

同君は、大正11年1月に千葉市椿森町に生まれ、昭和16年3月県立千葉商業学校を卒業し、翌17年1月から20年12月まで軍隊に勤務、終戦時は陸軍主計将校であった。その前に台湾から内地へ転勤の折、その乗船が東シナ海でアメリカの潜水艦によって撃沈され、重要書類を抱えながら、長時間泳いで漸く助かったのであった（ついで乍ら、柴田教授のニューギニアにおける長期間の悪戦苦闘については、同氏編著の『航跡——独工10、船工5戦いの跡——』を参照）。

終戦後明大商学部に入學し、昭和27年3月に卒業。優等生の染谷教授と共に、同4月に助手補に任じられた。そして田中豊喜先生と私のどちらかを選んで師事することに成ったとき、笠原君は私の方を選んだのであった。31年4月に両君とも専任講師に任ぜられた。同年10月には、笠原君の「ソ同盟社会保障の現代的課題」と題する論文が、保険学雑誌に掲載された。

35年には、コーニシンの『ソ連邦の保険』を訳して出版、その際ロシア語については、森章教授の援助を受けるところが大きかった。やがて44年の海外留学には、モスクワおよびレニングラードで、ソ連の保険学者たちの指導を求

めながら、研究を進めた。

48年3月には、代表的著書『保険経済の研究』を公けにした。同書は、外観的、技術的あるいは形而上学的抽象論のいずれにも堕することなく、マルクス主義的方法に立脚して、あくまでも、社会的総生産過程との関連で保険ファンドの本質を分析し、更に資本主義社会における保険ファンド形成の歴史的意義を考察し、その担い手としての保険資本の経済的本質を究明する課題と取り組んだ。特に第4章「現代保険会社の金融資本的機能の実態分析」においては、我国における保険会社の金融面における具体的役割を、多数の表を挙げて詳細明快に示した。本書を代表的論文として、51年3月に商学博士の学位が授与されたのは、けだし当然である。

なお50年には、モティレフの『ソ連邦の保険』を訳出した。これは全国労働者共済生活協同組合連合会（略称全労済）の水越哲郎氏との共訳であり、前記『ソ連邦の保険』以後変化したソ連国営保険の実態を知るのに不可欠な文献である。

なお全労済と関係するに及んで、「労済は生活協同組合運動の一環である。従って労済運動について分析するには、協同組合運動そのものの研究を進めて行かなければ、大局の指導はできない」として、協同組合の歴史から各種協同組合運動の研究を始めたのであった。全国共済農業協同組合連合会（全共連）との結びつきが出来たのも、自然の成行きである。

51年4月には、光文社のカップビジネスの一環として、『保険に強くなる本』を公けにした。親友であった慶応の庭田範秋教授は、同書のバックカバーに次のように書いている。「笠原さんとお会いして歓談していると、暖かい春の陽ざしを浴びているような気がする。温厚な人柄が、絶えない微笑をつうじて、こちらに伝わってくるのである。社会全体に対する幅広い見識が、座談の内容に盛り込まれていて、実に楽しい雰囲気となってくる。

それでいて学問に対する姿勢となると、厳しい鋭さが発揮される。ご時勢に理論をあわせるのではなく、正を正とし、邪を邪とする本来の学者の在り方が浸みついている。その意味で、本当に信じられる人である」と。

次に、明大の行政面における同君の活動について述べるならば、先ず商学部から選出された最初の学生部長であったことを挙げなければならない。その任期中は一度も理事会との団交を行わせなかった。これは急進的な学生たちの要求を、話し合いに依って辛抱強く解決して行ったためである。なおその当時、学生会をリードしていたS君は、卒業を前にした或る日のこと、色々御面倒を掛けましたと言って、同君および学生課の職員たちに、沢山の菓子を届けたそうである。これはS君の人柄を偲ばせると共に、笠原君の人徳を偲ばせる一つのエピソードでもある。

田中豊喜先生は、病気のため51年春に商学部長を辞任され、その後任として、笠原君が幾人もの先輩をさし置いて選出され、53年9月まで在任した。志田先生と私、それに笠原君と、同一講座の担当者が、師弟3代に互って部長になったのは、明大では初めてのことであろう。ただし同君が学部長在任の折には、明治高校の人事問題で、大分苦労されたもののようである。

同君の病氣中、黒田君は長い期間にわたり、遠路を厭わず見舞を続け、遂に死亡の前日、口もきけない笠原君から、「アトラスベタノム」と云う意思表示を受けたのであった。長い間献身的に看護された暁子夫人、独り息子の笠原君に先立たれ、未だ高校生である孫ひとりを遺された御両親、これらの方々の胸中を思いやるとき、慰めの言葉も無く、涙のにじむことを禁じ得ない。

告別式は10月20日の午後2時から、黒田君を葬儀委員長として執行され、明治大学長山本進一氏、日本保険学会理事長木村栄一氏、日本学術会議第三部会長安藤良雄氏の3氏が弔辞を読まれた。時間の関係上読まれなかった染谷教授と黒田君の弔辞、ならびに押尾助教授と私の追憶の言葉は、私のゼミナール機関誌「溪流」の第29号に収録されている。笠原君と多年研究室を同じくしていた森宮教授も、私のもとで保険学を研究し来たった学徒であり、明大における保険学研究的の灯は、今後とも絶えることはあるまいと思われる。笠原君の在天の霊が、安んじて今後を照覧されることを信じつつ、本稿を終ることとする。